

島小の教育実践 —初期の学校公開研究会を中心に—

Educational Practice at SHIMA Elementary School:
Focusing on the Formation Process of School Public Research in the Early Stage

狩野 浩二
Kouji KARINO

要旨

斎藤喜博が校長を務めた島小において、赴任当初の1952年から3年間は、学校公開研究会を開催しなかった。その間、公立学校としての学校づくりを展開するための基盤づくりを行っていた。その基盤には、学校を参観したいという外部からの要請と、児童にとってのハレの舞台を創造したいという内部からの要請にこたえるための対応があった。本校では、島小の学校資料をもとに、同時代に島小に起きていた事実之光をあて、学校づくりと学校公開研究会の萌芽的状况について検討する。

1. 島小の学校づくり

斎藤喜博(1911-1981)が校長として勤務(1952-1963)した群馬県佐波郡島村立島小学校(以下「島小」と略記)は、1955年から8回にわたる学校公開研究会を開催した。その中で子どもの表現的な活動を特に公開し、子どもの姿の上に学校教育の成果を現わそうとしていた。そこには学校教育の成果を子どもの姿の上に実現しようとした斎藤喜博の学校づくり観、授業観が強く反映していた(狩野浩二、島小の教育実践—学校づくりにおける公開研究会を中心に—、2019年2月、『十文字学園女子大学紀要』第49巻、P123-135)。しか

しながら斎藤喜博は、島小に赴任した当初(1952年)から1954年までの3年間は学校公開研究会を開催しなかった。このことは一般的には学校づくりが緒に就いたばかりであり、学校公開研究会を実施するだけの内実が島小には伴っていなかったというように理解されている。

斎藤が島小に赴任した当初は、島小の学校経営方針として「子どもの解放」「教師の解放」が鍵言葉であり、確かにまだまだ学校公開研究会を実施するのは時期尚早である。そのように仮定すれば、1955年から公開研究会を8回にわたり開催した(1955年第1回-1962年第8回)という事実は、1955年には斎藤喜博自身が納得のいく学校づくり

をなしえていたといえるが果たしてそうだったのだろうか。本稿の課題はこのことの解明にある。本来的な意味で学校づくりを公開するだけの実質が当時の島小において形成されていたか、あるいは別の動機が学校公開研究会の実施にはあったのか。そうした具体に迫ることが本稿の課題である。

島小(1952-1963)以降は、a. 斎藤喜博自身が行った学校づくり(群馬・境小、1964-1969年)、b. 斎藤喜博が指導した学校づくり(兵庫・御影小等、1967-1981年)、c. 斎藤喜博没(1981年)後において関係者が行った学校づくり(東京・瑞穂第三小等、1976年～現在に至る)が継続している。こうした関係者(「教授学研究会」の会員の他、斎藤喜博の指導を受けた実践家や研究者等)による取り組みは、必ずしも学校公開研究会の開催に当たって公開するだけの実質が学校づくりにおいて伴っていたかどうかは管見の限り課題とされていない。筆者が関わった学校づくり(c、1997年～現在)においては、校長が赴任当初から学校公開研究会の開催を計画している例もある。いわば学校公開研究会と学校づくりとは不可分の存在であり、車の両輪となっている。だとすれば斎藤喜博において島小が初めての学校づくりだったとはいうものの、赴任当初の3年の空白(1952-1955年、学校公開研究会が開催されなかった時期)がむしろ特別であったようにも見えるのである。したがって今日のように学校公開研究会と学校づくりとが「=(イクオル)」の関係になる以前において両者をつなぐ決定的な事実が斎藤赴任当初の3年間の島小には存在した。

本稿では斎藤喜博が島小赴任当初においていかなる学校づくりを行ない、またそのなかで学校公開研究会と学校づくりとを不可分の関係と見るにいたる事実が果たして存在するか存在しないのかについて検討するものである。

2. 学校公開研究会の意味

斎藤喜博は学校公開研究会を開催する理由として島小を参観する者の要請に応えるということを示している(狩野、島小の教育実践—学校づくりにおける公開研究会を中心に一、前出)。確かに島小では日増しに参観者が増えている。島小に備え付けてあったといわれる学校参観者名簿は未発掘であるが、それを整理した統計が『島小11年史』(金子緯一郎編、麥書房、1966年。後に大空社から刊行された『島小研究報告』第6巻、1995年に所収された)に掲載されている。

『島小11年史』は1966(昭和41)年1月に刊行された。発行元の麥書房は、当時篠崎五六(1922-2003)が率いる教育系の出版社である。同時に篠崎五六は島小の応援者・信奉者であり、島小における国語の教材選択などについてアドバイスをする等の関係を保っていた人物である。そこから刊行されたのが『島小11年史』である。同校の教師だった金子緯一郎が編者である。それを見る限りにおいて島小11年間(斎藤喜博校長の在職期間であり、学校づくりの期間である)で1万人を超える参観者がいた。こうした一般的な手続きにより学校公開研究会に参加した参観者以外にも参観者は存在した。斎藤喜博によれば、通常の授業日にも参観者があった。通常の授業日においても週の中で参観可能な曜日を定めてもいた。それにもかかわらず中にはまったく予告もせず学校を訪ねた例もあった(斎藤喜博『私の教師論』麥書房、1963年、『斎藤喜博全集』第7巻、1970年、100～168頁)。

事前に参観申し込みの手紙を寄こすのはまだよい方であった。中には一方的に自分たちの都合で島小を訪ねると言ってきた例もあった。そのような場合でも斎藤喜博はできるだけ丁寧に対処している。参観を断わる旨の葉書を書いて返信したこともある。それでもそれを無視して見に来る教師もいたということである(斎藤喜博『私の教師論』麥書房、1963年、『斎藤喜博全集』第7巻、

1970年、100～168頁)。

こうした多くの参観者の要請に応えるという意味は島小の学校公開研究会には当然あったといえる。参観者に学校を公開することは次第に島小の使命となっていく。現に斎藤喜博自身は、“島村の島小”から、“日本の島小”に変わっていったと記録している(狩野、島小の教育実践—学校づくりにおける公開研究会を中心に一、前出)。

こうした学校当事者の自己認識は、それだけ島小に対する社会の関心が高まったことの証左である。参観者が次第に増加していくということは、島小が様々な意味で社会の関心の的となったということである。それに斎藤喜博が応えようとしたということは十分に考えられることである。しかしながらそれは島小の学校づくりに限ったことであった。

3. 学校公開研究会と学校を公開する意味

それでは斎藤喜博や島小にとって学校公開研究会は、参観者の要請に応えるという意味だけであったのだろうか。先述の通り参観者といってもその関心や問題意識はさまざまである。出張のついでだからと立ち寄る教師がいたり、このための目的で手弁当てで遠方からはるばる訪ねる教師も存在した。そのような幅広い参観者がいたという事実からすれば、またさらにいえば参観者からの要請に応えるということだけであれば別の方法もあったのではないか。

斎藤喜博は島小の校長を1963年の3月に終える。それも突然(3月27日に決定)の不意転である。利根川を挟んだ境町にある境東小の校長が急死し、そのかわりに斎藤喜博が校長として異動することになる。前・境東小学校長の学校葬が4月4日に行なわれている。したがって突然の人事異動である。そしてさらに翌年(1964年)の4月には、境小校長となる。斎藤喜博は、境東小学校(1年間)、境小学校(5年間)と校長としての学

校づくりを継続する。その仕事の中では、斎藤喜博は参観者を限定する。

後に「教授学研究会(教育科学研究会教授学部会が独立し、斎藤喜博を中心とする研究会が1973年に成立する)」の世話人となる松本陽一は、当時小学館の編集者として教育雑誌の編集に当たっていた。自ら斎藤喜博に関心を持ち、生涯斎藤喜博の研究に関わっている。その最晩年に筆者が当時の状況を聞いた。松本は、境小校長当時(1964-1969)の斎藤喜博が特に熱心な参観者に対してのみ、自校の教育活動を公開していたというのである。つまり斎藤喜博は参観者をA. 熱心な参観者、B. そうではない参観者に区別して考えるようになったということである。

松本は自らが境小の音楽会を訪ねた際のことをしばしば証言している(斎藤喜博研究会において聴取)。それによれば限定された参観者は境小から学ぼうとする人たちである。したがってそういう意味では、学びたいという参観者には斎藤喜博は門戸を開いていた。その後“土曜の会”や宮城教育大学での勉強会の開催など、学びたいという者に対しては、熱心に指導するのが斎藤喜博である。そうしたことから考えてみれば、島小において参観者がいればその声に応えようとしたのが斎藤喜博であると考えてのみに無理はない。

島小において斎藤喜博が困惑したのは、B.の参観者、つまり“学ぼうとしない参観者”の存在である。物見遊山的に学校に来る参観者に対して腹を立てていたのである。それでも島小の学校づくりにおいては、A.だけではなくB.に対しても参観を許している。むしろ煩わしいと思いつつも、参観者が増えることを期待していたと見える。その証拠に島小の学校づくりの最終段階(1960年第6回公開研究会から最終回の1962年第8回まで)においては、年に二度にわたる公開研究会(最大の参加者が見込まれた群馬県内の参観者と、県外の参観者をわけ、同一年度内に2回の公開研究会を開催する)を開催するまでに至る。

以上のことからすれば、斎藤喜博においては学

校づくりを通じて学校を公開することは、ひとつには、教育の“運動的”な意味があったと推察される。

今日では学校における公開研究会は、義務的な意味で行なわれるものと自主的なものとに二分され、さらに前者は啓蒙的な意味を持つ附属学校等の公開と研究指定校等の公開研究会が存在する。いずれにおいても子どもの姿を公開するか、教育運動としての意味、あるいはまた参観者の要請に応えるということは皆無である。島小の同時代における学校公開観あるいは、学校公開論は慎重に検討すべきことからではあるが、斎藤喜博の場合にはそうした今日の公開研究会観を超越する意味合いが込められていた。

島小においては自校における教員研修の都合とか、学校づくりの検証とかいうことを超えて運動としての学校づくりを展開しようとしていた時期が当初の島小にはあった。

4. 島小校長としての在任期間

斎藤喜博は島小に赴任した際（1952年4月）、急な変更により赴任先が決定したと記録している。本来赴任する予定だった学校ではなく赴任先は想定外の学校であった（斎藤喜博『島小物語』麥書房、1964年、『斎藤喜博全集』第11巻、国土社、1970年、331～333頁）。そのうえで赴任当初から数年間で学校づくりを終え、次の学校へと異動することを想定していた。実際斎藤喜博が島小に赴任した1952年には、斎藤喜博は41歳である。島小に赴任した校長は、斎藤喜博の赴任以前においてほぼ1年から2年のペースで校長が替わっている。そのことを村長が嘆いたという事実も記録されている（斎藤喜博『学校づくりの記』国土社、1958年、『斎藤喜博全集』第11巻、国土社、1970年、46～47、50頁）。

その後斎藤喜博は、島小での校長としての学校づくりについて5年から7年という数字を挙げ、腰を据えて実践する意気込みを示している（斎藤

喜博『島小物語』麥書房、1964年、『斎藤喜博全集』第11巻、国土社、1970年、340～341頁）。数年ではなくもう少し長い時間をかけて学校づくりを行なうことを宣言するのである。そこには保護者や地域の島小、斎藤喜博への期待がある。それに迎えるかたちで島小での学校づくりを“時間をかけて”実行する決意をしている。当然のことながら校長の人事異動は本人の希望などではない。この当時の島小においても同様である。したがって、11年間にわたる島小校長としての学校づくり（1952-1963）は、さまざまな偶然により継続したということである。

5. 斎藤喜博赴任以前と以降の島小

それでは斎藤喜博が赴任する以前の島小と赴任後の島小とでは、何がどのように異なっていたのか。斎藤喜博は赴任当初から学校づくりを展開し、そのなかで島小の教師たちには実践記録を書くことを勧める。そしてその成果として『島小研究報告』が刊行される。

『島小研究報告』（『島小研究報告』第1巻、大空社から1995年復刻版）は当初は謄写版刷りで発行された。発行に当たり学校の内外の協力者がガリ版を切る仕事や印刷・製本する作業を手伝っている。第一集は1953年2月に刊行される。斎藤喜博が、島小に赴任した年（1952年）の三学期である。執筆者は、金井栄子、船戸咲子、柴田（田島）信子、柴田（栗田）梅乃、桜井恒有の5名である。「あとがき」を斎藤喜博が執筆している。

金井栄子は、本校1年生の担任をしていた時期であり特段斎藤喜博赴任前と後との違いについては言及をしていないが“表現欲”という言葉を使いながら受け持ち学級の児童について具体的な描写をしている。金井はこの年で教員生活10年目であるといい島小においては中堅教員であるが、斎藤喜博の方針に従って実践記録を書き始めていた。

船戸咲子は後に“典型学級”を創造する教師で

あり、赤坂里子や海東照子などとならぶ島小のすぐれた教師のひとりである。当時は分校2年生を受け持っており、短い文章ではあるものすでに後の活躍を想像させる具体的な描写が出色である。船戸咲子の記録は、島小や斎藤喜博の実践記録にも掲載されるなど斎藤喜博が赴任した当初の島小において学校を牽引する役割を担っていたと考えられる。

柴田信子は、本校4年生を受け持っていた。『島小11年史』（金子緯一郎編、麥書房、1966年）では、昭和27年の年譜に「本校4年 田島信子」とあり、同一人物と考えられる。翌、昭和28（1953）年3月に退職しており、斎藤喜博が島小のベテラン教師の中でも、変わろうと努力していた教師のひとりとして特筆している。

次の文章は、斎藤喜博が『学校づくりの記』において記録した柴田（田島）信子をさすと思われる一節である。『島小研究報告』に執筆した内容からは、子どもの事実に基づく確かな実践が行なわれていたことが理解できるのであり、斎藤喜博からも高い評価を得ていたことがわかる文章である。「おばあさんの鈴木夏子（記録では仮名である一引用者）さんは、村の人からの評判も悪い人だった。教育界でも『反抗もので、がりがりの分らず屋だ』というレッテルをはられていた。けれども私がみると、その先生は実に頭のよい素直な人であり、年寄とは思えないほど純粋で正義感が強く、若々しい感じ方のできる人であった。／ただこの人は、すじの通らないことには絶対に承服しなかったし、自分の思うことは、どこでも論理整然と主張した。よく馬場さん（教務主任、茂木平八と思われる一引用者）と争いをしていたが、この場合も馬場さんのいい方や考え方が非論理的なので、この人には承知できないのであった。同じ問題でも私が説明をするとよくわかってくれたし、他の職員にも『校長のはすじが通っているから反対されても、しゃくにさわらない』といていた。／鈴木さんは、私が赴任した一年後の三月退職した。私は、この先生が自分を一番早

く理解してくれたと思っていたし、職場にとっても必要な人だったのでやめてもらいたくなかった。またそういうことがなくても、どの人にもやめてもらいたくないと思っていた。それで異動のぎりぎりのところまで考えなおしてくれるのを待っていたが、疲れたとってやめていった。／先生がやめるという話をきいた親たちは、この先生のために特別の送別会をひらいてくれた。一年前までのこの学校には、こういうことはぜんぜんなかった（保育園の心温まるような送別会に参加した斎藤喜博が島小の送別会がまったく貧弱であったことを嘆いて、記録した文章が残っている一引用者）ので、私も出席して、学校の先生を大事にしてくれることを親たちに感謝した。鈴木さんも涙を流して親たちに感謝し、それにつけ加えて『私は三十年も教師をしましたが、斎藤校長先生がきてからはじめて教育の楽しさを覚えました。その点だけが今は心残りですが、もうどうにも年をとって身体が続かなくなりました』といた。／私はいつも思った。この先生が今二十代だったら、どんなすばらしい教師になったろうかと、残念でならなかった。今までの日本社会は、とくに教育界は、こういう先生を『あつかいづらい人間』とし『反抗者』としておさえつけてしまっていた。このすぐれた資質を持った先生も、三十年の長い間、その犠牲となって、せっかくのすぐれた資質を押しつぶされたまま職を終わってしまった。（斎藤喜博『学校づくりの記』国土社、1958年、引用は、『斎藤喜博全集』第11巻、81-82頁、国土社、1970年によった）」やや長く引用をしたが、たった一年ではあるものの斎藤喜博が赴任した島小において抑圧され、縮こまっていた教師が自分を現わすように変わっていった。

柴田（栗田）梅乃は、分校5年生を受け持っていた。1955年まで島小の教員として活躍し、農業をするために島小を離れていった教師である。年齢は未詳であるが、『島小研究報告』に文章を寄せるなど、熱心に実践に取り組んでいた教師である。

桜井恒有は、年齢は未詳であり1954年3月には、島小を離れ、隣町の境小に異動している。斎藤喜博が学校づくりを行なった期間としては、2年間だけの勤務である。1952年に本校6年生を、1953年に本校4年生を受け持っている。記録からは古いタイプの教師と読み取れるが島小の児童の事実を記録しようとしている。

翌1954年8月には第二集が刊行される。執筆者とテーマは次の通りである。私の級の子ども 赤坂里子／子供の心 井上光正／子供から拾った記録 桜井恒有／感じたこと 柴田梅乃／いじけについて 大沢清剛／五年生の受持になって 加藤とみ子／お部屋の保ちゃん 田島富佐子／あとがき 金子緯一郎

そして同じ年（1954年）の11月には第三集が刊行される。テーマは「島小へ赴任しての印象」である。みんなでやっといこうとする職場 赤坂里子／島村に来て 金子緯一郎／私の見た島村 武田常夫／附 島小概要／あとがき 島小研究委員会

続いて第五集「この三年間で得たもの」である。1955年（昭和30年）5月斎藤喜博が4年目の学校づくりに着手した時期であり、この年から学校公開研究会が開催される。そしてこの第五集では斎藤喜博以前の島小の状況が活写される。

斎藤赴任以前から島小に在職していた職員たちは次の12名である。茂木平八、柴田（田島）信子、金井よしゑ、栗原佐馬太、阪本弥保、桜井恒有、柴田（栗田）梅乃、田島富佐子、加藤とみ子、井上光正、船戸咲子、金井栄子。このうち斎藤喜博とともに島小の11年間の学校づくりを経験するのが船戸咲子、茂木平八、金井栄子の3名である。井上光正は10年目の年までは参画するが、最後の一年を待たずして異動している。そして同期間中に退職したのが柴田（田島）信子、栗原佐馬太、金井よしゑの3名である。田島富佐子と加藤とみ子は、第1回公開研究会にはいずれも参加し、『島小研究報告』にも執筆している点からみて概ね斎藤喜博の学校づくりについて協力をして

いる。したがって斎藤喜博が着任した1952年当時においては公表できなかった事実があると考えるのが妥当であり、その事実が第1回目の公開研究会が開催される1955年には公表された。実際、先述の『島小研究報告』第五集（1955年5月）にはかつての島小の状況などが記録される。

次の文章はいずれも第1回公開研究会が開催された1955年の記録である。『島小研究報告』第五集に掲載され、かつての島小の状況（斎藤喜博校長が着任する1952年4月以前の状況）が記録されている。こうした事実は『学校づくりの記』（1955年）や『島小物語』（1964年）によって斎藤喜博の手によっても記録され明確化されるが、それ以前においては管見の限りにおいて『島小研究報告』が最も最初のものともてよい。

加藤とみ子は、斎藤喜博が島小に赴任する前から島小に勤務していた教員である。1952年に斎藤喜博が島小に赴任した年に本校の2年生を受け持ち、翌53年が本校5年、54年が本校1年、55年が同じく本校1年生の受け持ちである。その後、56年、57年と学級担任を離れ、保健や庶務などの仕事をし、その年を最後に境小へ異動した教師である。

斎藤喜博校長の下では本校のみで勤務している。これは当時の島小が利根川の渡し舟によって本校と分校とが分断されていたこと、西側の本庄（埼玉県）にちかい本校側に住む教師たちは本校での勤務を希望し、東側は分校を希望するというかつての島小の状況を強く反映していた。

島小と、言う、まるでのけもの形で、扱われたのはまだ過去三年前に過ぎない。其の当時は、何処の会議へでもまるで、まますの様で、一口に、「なんだ島村か」と、片隅の方へあっさり片付けられ勝ちと、言った、状態だった。顔出しだけは何処へでもしたものの、発言する勇氣に缺（欠—引用者）けていたのか、唯黙して人のしゃべる事だけ聞いて帰ったものだ。当時は職場にも、父母にも、又、子供にも、何かしら、抑圧のボール

が掛かっていたに違いない。そして誰しも思う発言も控へ目にして、いじけたままの姿で、長い間封建的な社会の荒波と戦いつつ、歩み続けて来たのだ。／昭和二十七年四月、斎藤先生が島小へ赴任して来て以来、職場の空気は一変した。あらゆる場に於いて、会議が持たれ、何かと、話し合う機会が多くなっていった。毎（殊一引用者）に研究会、木曜談話会等が、大いに意義深い様に思へた。若い人達が、暇ある度に何時も斎藤先生を囲んで何かしら良きものを掘り出そうと務（努一引用者）めている其の努力に時折心を打たれるものがあった。…（略）…（加藤とみ子私の感じたこと、島小研究報告 第4集 この3年間で得たもの 1955年5月30日 65頁）

文章や使用する漢字、言葉遣いには誤用や脱字等が見られる。文章全体にさまざまな課題が見られる。この文章が加藤とみ子自身の原稿のままなのか、あるいは謄写版刷りの原紙を切る作業で作業にあたった人間の書き癖が反映したのかは不明である。いずれにしても斎藤喜博が島小に赴任する以前から島小に勤務していた教師たちは、同時代にともに過ごした仲間が次第にいなくなるにつれてこうした文章をものにする。

次の文章は茂木平八によるものである。茂木は加藤とみ子同様に斎藤喜博赴任以前から島小にいた教師である。斎藤が赴任した1952年から教務主任として学校運営と要となる。記録によると茂木平八は、1905年生まれで、斎藤喜博（1911年生まれ）より6歳年かさであった。

私の教育観は概念的であった。かつて検定試験を受けたとき、「教育とは何ぞや」との問いに対し教育とは有意的具案（ママ一引用者）的継続的に子弟の育成を目的とするものである。」と答へ見事パスしたことがある。それ以来「教育とは何ぞや」主義、即ち概念主義者になってしまった。／概念主義者は、自分の目で見、自分の頭で考え、正しく物事

を判断し、実際に行ってみるということをしないうで、書物にたより、人の言葉に左右され、「もとはこうだったとか」（「一引用者」）村にはこんな伝統がある」とか、常に、後っしやり（先例を重視する、保守的な態度を意味するか一引用者）の教育が考えられていた。したがって保守的であり、進歩がなく、生き生きとした姿にかけていたのである。…（略）…（垢おとし一三年間に得たもの一茂木平八、島小研究報告 第4集 この3年間で得たもの 1955年5月30日 67頁）

斎藤喜博は、リアリズム主義者であり、実質主義者である。島小で当初から学校の取り組みの中心となったのが子どもの姿に学ぶということである。茂木がここでいう「概念主義」は、島小では最も遠ざけなければならないものである。そうした茂木の自己認識が正しいと思われるのは、この文章がここに並ぶ他の島小職員の文章に比べれば、極めて概念主義であり、形式主義である。言葉の上では、リアリズムが大事であり、実質主義で行かなければならないと分かっている、やはり記録の上では形式的であり、保守的である。

ちなみに斎藤喜博は赴任当初（1952年）において島小には自分（41歳）よりも年かさの職員が6名いたと記録している（斎藤喜博『学校づくりの記』国土社、1958年、『斎藤喜博全集』第11巻、国土社、1970年、80頁）。筆者が整理したところ以下ようになる。柴田（田島）信子：生年未詳／金井よしゑ：生年未詳／木村悦三1903年生まれ／茂木平八1905年生まれ／栗原佐馬太1905年生まれ／大沢清剛1908年生まれ

柴田（田島）信子と金井よしゑの2名は、先述の通り1952年度をもって退職している。茂木平八は、教務主任であり、栗原左馬太は、庶務主任である。茂木と栗原の二人の生年は、1905年と同じ年の生まれである。斎藤喜博より6歳年長者である。

木村悦三は、栗原左馬太が1953年3月に退職した後、1955年から庶務主任となる。そして、1961

年3月には退職、斎藤喜博とともに9年間の学校づくりに参画する。そうすると、この6名のなかで実質的に島小の学校づくりに参画し得たのは大沢清剛一人である。斎藤喜博は「年寄」と表現し、やや否定的な雰囲気ではあるが、大沢清剛は斎藤喜博の3歳年長であり、尚かつ島小の学校づくりを11年間経験した職員である。その間、常に分校の受け持ちとして島小を支え続けたわけである。

ちなみに大沢清剛は、島小赴任以前は中学校(剛志中)の教員であった。管見の限り、こうした例は大沢だけである。担当教科は未詳であるが、斎藤喜博より3歳年上であり島小において11年間異動しなかったという事実を踏まえれば、斎藤喜博が赴任当初において「年寄の人たちをも含めて、全部の先生を信頼しようとした。人間が人間を信じられないくらい、なさけないことはないと思っていた。だからここの先生たちも、全部がりっぱな人であるし、腕のある先生になれる人たちだと信じていた。まだ実践の喜びを知らないだけだと思っていた。人がなんといおうと、自分は自分の目で先生たちの一人ひとりを見て、そのよいところを見つけようとした(斎藤喜博『学校づくりの記』国土社、1958年、『斎藤喜博全集』第11巻、国土社、1970年、81頁)」と記録したことは、特筆してよいことである。島小の地域や児童の中にある「封建制」をいかにして変革するかということが斎藤喜博の赴任当初の仕事であり、それが済まなければ学校づくりを展開することは難しいと斎藤は考えていた。その中で、同僚の教員(職員)を変革することは、もっとも大事なことであると斎藤は考えていたと思われる。その根拠としては、同僚に対する苦言を含む実践記録を仮名にし、また、その刊行を1955年まではしなかったこと、同様に、『島小研究報告』においても、先述の通り、学校公開研究会が実施される学校づくりの4年目(1955年)までそうした事実が記録され、公表されなかったこと等が考えられる。

現在のところ、まったくの推察ではあるが、しかし、学校公開研究会が開催されなかった斎藤喜博赴任当初の3年間(1952-1954)において、地域や児童、同僚たちを変革する事に集中したことが、こうした事実から推察されると思われる。

次の記録は、金井栄子が執筆したものである。『島小研究報告』のなかでは、最も多くの紙幅を割き、斎藤赴任以前の実情を活写している。金井は、1925年生まれ、斎藤喜博から見れば、14歳年下の教員である。島小に赴任したのは、1948年、23歳の年であり、新卒で赴任したと思われる。斎藤喜博が島小に着任した1952年には、教員5年目である。ちなみに同じ年において船戸咲子は、25歳(1927年生まれ)、井上光正は、20歳(1932年生まれ)である。斎藤が赴任当初から炬燵談話に誘い、児童の事実をもとに学びあう雰囲気を創ったメンバーは、このことから金井栄子、船戸咲子、井上光正、柴田(栗田)梅乃であると推察される。

私が分校開校と同時に、勤務したのは、昭和二十三年十月のことであった。其の頃は、本校と分校との連絡は、殆ど学級外の分校主任がしていたので、私達は本校の先生と一緒にいる機会是一年にたった一二度、それも、ゆっくり話し合うなどせず、顔をあわす程度だったので、同じ小学校でありながら内部のことはお互いに分からず、それでいて、其の必要感も持たない程のんびりした(ほんやりした)毎日が送られていたのだ。／そうした時期に、一身上の都合で、本校勤務と決まった時、一番心配だったのは、本校には昔から「ちょうちん学校」という、有難くない異名が、残っていたことであった。最年長の女の先生が姑と仲が悪いので、早く家へ帰られず、毎日暗くなるまで、学校に居残っている。若い人達は、帰りたくても帰れず、おしょうばんを務めて、足元が見えなくなってから皆一緒に校門を出るならわしになっているというのである。たまたま用事で

早く帰った時など皆の前で皮肉られて泣いたりしたことが何度もあったとか、私は最初のふんざりがいちばん大切だと思い、憎まれることは覚悟して出勤第一日目から時間がきたら帰ることを実行した。私の前では誰もそのことは批判しないけれど無気味な静けさとはあのことなのだろう。／後でできたことであるが「あの人は新しい嫁さんだから別だよ」と、他の先生方にと、め（←「とどめ」の意か）をさしていたという。私は永らく異分子扱いされたい。でもやはり帰る時刻がくると又やな思いをしなければならぬと思ひ、気持が重苦しくてやりきれなかった。云いたいことがあっても長上にはさからうことは許されない、表面おだやかそのものの職員室だったが、姑に仕える嫁といった感じがした。不服があつて申し立てれば、若いくせに生意気だとまくしたてられた。／こうした時赴任してこられた斉（ママ引用者）藤さんが、まっ先に職場の民主化をさげばれて、私達が誰にも気がねなしに行動できるよう凶つて下さったことはどんなに感謝してよいかわからない。最近では年長の人でも気軽に話しかけられるようになった。職場が開放的になったからとて気ままな自だらくな生活をしようとは思っていない。それだけに責任を強く感じるから。／八・九年教師生活をしていて、校長、教頭、年長の先生方が身近に居ると何だか、かんとくされているみたいで、けぶつたくて重苦しく思っていたが斉（ママ引用者）藤さんになってから、校長の見える日がまちどう（ママ引用者）しくなってきた。…（略）…（斉（ママ引用者）藤さんから得たもの 金井栄子 島小研究報告 第4集 この3年間で得たもの 1955年5月30日 55～57頁）

「提灯学校」は正確に言えば附属学校などの研究学校に対して使われた呼称である。ここではそうした肯定的な使用ではなく、否定的な意味で使

用されている。金井が「私の眠っている心をゆさぶり起こしてくれる」というように表現しているが、教職五年目を迎え本来であればいよいよ実践者としての道を歩み始めるというときにもかかわらず、先輩から頭を押さえられ封建的な雰囲気の中でおそらく師範学校を卒業後にすぐに島小に採用になった中で、卑屈になり、いじけていたと思われる。筆者の経験においても新卒で採用された学校の雰囲気がその後の教職生活を決定づけてしまう。そういう意味では金井にとっては『島小研究報告』に島小の同僚の中で最も多くの紙幅を割り、斎藤喜博が赴任する以前の島小の状況をここに活写したのは相当に大きな意味があった。そして先述の通り、金井の文章に登場する先輩の女性教師たちは、島小が四年目の学校づくりを迎え、学校公開研究会を開催する時期には、すべていなくなっていると考へてよいわけである。島小として職員の新陳代謝が進み、いよいよ学校づくりの態勢づくりが出来つつあることを予感させる金井の証言である。

次の記録は井上光正のものである。井上は、斎藤喜博が赴任した1952年当初において、最年少（20歳）の教員であった。

…（略）…教職に就いてから約四年になるが赴任して最初の職員会の時、教務主任を投票してきめたのであるが、その時の雰囲気は固く、何か重々しく感じた。校長とか教務主任とか云々と学級主任より一段偉く何か権威を持っている様に思われた。だから校長や教務の云う事は少し不満があつても聞かなければならなかつた。いつの会議でも発言する人は大体決まっていたようである。その発言も率直に表現せず遠まわしに云つたり、聞きとりにくく、何か重苦しい感じがした。普段でもお互いが裸になつて話し合う事はない。いや出来ないのである。うっかりしたことをしゃべると後でどんなことになるかわからない。私もいい気になつてしゃべつたら相手にいい材料をつかまれてしまい逆に利用されてしま

い後で当（て一引用者）擦られて、ひどい目に合った事がある。だから皆構えており、当たり前さわりのない様な事を云うのである。／学年末に近ず（ママ一引用者）くと「転任させられやしないか」とか「首になりやしないか」とびくびくし、人事のうわさで大変である。噂であるからそう云うことは表面には出ず、みなどこ吹く風ですましているが内は暴風である。私はつくづくこの様な職員社会がやんってしまった。／次の年（1952年一引用者）斉（ママ一引用者）藤さんが赴任されてからこの様な事をなくし、職場の雰囲気自由なものにし、実に楽しく働ける様に職場の民主化が盛んに行なわれた。或る時先生方を呼ぶ時に「先生」と云わず「さん」で呼ぼうという話し合いになり始めてみたがどうも一番若い私が年上の先生に向かってさん呼ば（わ一引用者）りをする事は、何だか気がひけるような感じがしてつい「先生」と口に出てしまう。それを意識的な勇気と努力によって現在では平気で校長をも「斉藤さん」と呼べるようになった。…（略）…（三年間で得たこと 井上光正 島小研究報告 第4集 この3年間で得たもの 1955年5月30日 51頁）

井上光正は斎藤喜博が赴任した当初は分校の受け持ちであり、分校4年、分校3年、分校4年、分校5年と二回の持ち上がりを含む四年間を分校で過ごした後、1956年、島小の学校づくりの5年目、第二回公開研究会が開催された年から本校に移り、後述の通り島小の学校づくりが最大の山場を見せたと思われる1962年3月をもって島小を後にし、県内の小学校（世良田小）に異動して行くのである。金子緯一郎が編集した『島小11年史』（前出、112頁）によれば、教員の定員が一名減少したとあり、おそらく児童数の減少等により従来の学級数が維持できなくなった。転任する事情について斎藤喜博は『島小物語』に次のように記録している（『斎藤喜博全集』第11巻、国土社、

1970年、578～579頁）。

この年は、また定員が一名減らされた（前年に一名減となり、木村悦三が退職している一引用者）ので十三名になった。…（略）…過員があるので、誰かひとり転任しなければならなかった。川尻弘（井上光正一引用者）が十二年もいて長いからというので転任を申し出た。川尻さんは島小では、実践ではいつも他の先生に押され気味だった。あまりにも質の高い実践をする先生が多かったので、平板な川尻さんの授業はめだたないのだった。また川尻さんは教師としてももうひといき、ふっきることができなかつたし、授業でも同じだった。／川尻さん自身も自分の実践の弱さがよくわかっているようだった。しかし川尻さんは、島小という強力な実践者の集団のなかにいるから、他からも弱くみえ、自分でもそう感じるのだが、強い実践集団のなかにならば、十分に力をもっていただけに、十分に力をもっていた。おそらく他の学校へ行けば、自分の力を確認し、自信を持つようになるのではないかと私は思っていた。川尻さんもそう思っているようだった。／それで川尻さんの申し出を受けた私は、「川尻さんは今年あたり転任するのもしよいかもしれません。他の学校へ行って、自分の力を確認し、早く自信を持ったほうがよいかもしれません」といって、川尻さんの希望の、すぐ近くにある他郡の小学校へ転任してもらった。島小にこのままいると、強力な他の実践に押されたままになってしまうのではないかと思ったからだった。

その後斎藤喜博が予想したとおり、井上光正は新しい職場ですぐれた実践を展開する。こうしたその後の展開をみる限りにおいて、斎藤喜博が赴任した当初から10年間にわたり島小の学校づくりに参画し得たことは、井上にとって大きな財産である。校長をさん付けで呼ぶことは、斎藤喜博はいずれそのようなことに努力した学校があったと、笑い話になるに違いない、と記録している

(狩野浩二、島小における教職員の力量形成、2000年11月、『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第10巻、P47～62)が果たして実際はどうであったか。今日においても職場の民主化とかチーム学校とかいうように教職員や他の専門職集団との協力、共同がいわゆるなかで果たして島小のような学校づくりが展開し得ているか。

次は、柴田(栗田)梅乃の記録である。先述の通り斎藤喜博の学校づくりの当初からいた職員のひとりであり、かつ斎藤喜博が高く評価をしていた教師のひとりであった。当時の実情について次のように記録している。

…(略)…はじめのうちは、実践のよさを認め合う前に、感情で考えてしまっ「しつと」した事が度々あった。討論し合う場合も、その人を全人格的に批判するのではなく、「そのものだけでやる」と云うことを知り、反省会、研究授業の時などの、相互批判の基本的な態度となって来ている。そして結論をすぐに出さず、実践してみて、又話し合い、研究会、こたつ会議、木曜談話会と、いつでも、問題が流れていくようにして来た。／そして、年ばいの人、若い人も、同じ立場で思った事を、思いきりゆ(ママ)ってみる事に努力し、はだかになって、話し合えるようにして来た。…(略)…(三年間の実践で得たこと 柴田梅乃 島小研究報告 第4集 この3年間で得たもの 1955年5月30日 30頁)

“妬み”や“嫉み”などの職員の感情を指摘しており斎藤喜博が赴任する以前からあった教職員の間人間関係を表わしている。「はだかになって」という表現は島小の記録にしばしば登場する。“胸襟を開く”とか“へそをだす”などとも表現され、島小の学校づくりにおけるひとつの鍵概念ともなった(狩野、島小における教職員の力量形成、前出)。教職員間の年齢差を「年ばいの人、若い人も」というように描いた背景には、すでに述べたように斎藤喜博自身がベテランも若者も同様

に信頼しようとし、そのことに心を砕いたことの反映である。斎藤喜博は先述の通り柴田(栗田)梅乃や金井栄子など赴任当初から存在した若手教職員の力をまずは向上させることに心を砕きつつも、これも先述の通りベテラン教職員層を信頼するということにも心を砕いていた。若手の教員がこうした文章を公表できるまでに島小の学校づくりが展開していた。

次は赤坂里子の記録である。赤坂は斎藤喜博が赴任した翌年度から島小に異動してきた。赤坂は1953年4月、隣町の境小から異動してくる。木村悦三が同じ境小から一年前に転任してきたが、木村が1903年生まれで、島小赴任時には、49歳(斎藤喜博より8歳年上)であったのに対して、赤坂は、1931年生まれで、弱冠23歳である。斎藤喜博によれば、赤坂里子は、島小の阪本弥保(分校3年担任)との交換で異動してきたとのことである(斎藤喜博『島小物語』 麦書房、1964年、『斎藤喜博全集』第11巻、国土社、1970年、364頁)。斎藤喜博赴任から一年経過した時点のことを回想していると思われる。

誰でも住みよい職場、住みよい社会に住みたいと云う同じ願いの上でありながら気兼ねし合い、嫉妬し合い、思うことも云えず、したいことも出来ないせま苦しい職場や、社会にひしめき合いつつも平然としており、そうした中で自分だけの小さな仕合わせを喜んでる奴れい意識のみにくさ、きたなさ、みじめさを打ちやぶっていかなければならないのだと云う心をおこさせたのだ。そうした野火をつけたのは斉(ママ引用者)藤さんだった。…(略)…(学んだこと 赤坂里子 島小研究報告 第4集 この3年間で得たもの 1955年5月30日 22頁)

赤坂の記録は、これまで見てきた金井栄子や船戸咲子らと同様に、島小に残っている因習を改革することについて触れている。その先頭に立っていたのが斎藤喜博であった。赤坂は、この後分校での仕事を継続し、1956年に受け持った分校の1

年生を卒業するまで担任し続け、6年間持ち上げるといふ事実を残した。島小において10年間にわたり、学校づくりに携わる。斎藤喜博により上映が禁止された映画『芽を吹く子ども』（近代映画社、1963年、新藤兼人監修、原功監督）には、赤坂学級の児童の様子が中心的に描かれている。

6. 学校公開研究会

これまで見てきたように、島小は学校公開研究会を開催するまでの最初の3年間（1952-1954）から、第1回の学校公開研究会（1955年）を開催するまでの間、学校づくりの基盤形成に奔走している。島小の教職員は、できるだけ学校の中に留まり学校の中から発見された子どもの事実をもとに学びあうというスタイルを確立する。その結晶点が『島小研究報告』である。謄写版刷りで刊行されることの多かった同誌は、児童の姿を書き留めた実践記録をもとにして書かれている。この姿勢は斎藤喜博の文章において特に徹底している。島小においては実質主義とカリアリズムとか呼ばれ、観念的な物言いを排除することから教育実践を出発させた。その仕事の最初の山場が第1回目の学校公開研究会となる。

第1回目の学校公開研究会（1955年）には「解放と創造」というテーマが立てられた。斎藤喜博は『島小物語』のなかで「島小三年間の実践は、私たち島小の職員の意志にかかわらず、結果的には一つの教育運動になっていった。全国からも次から次へと参観の申し込みがあるし、また参観者から伝えきいた人も島小へ集まってきた。／それでその年の十二月には二日間の公開研究会をひらいた。県内や県外から、小中学校の先生、高等学校や大学の先生、学者、画家、教育研究者、演劇人、映画社の人、母親など、三百名ほどが集まった。村の父母もたくさん見学したり手伝ったりしていた（『斎藤喜博全集』第11巻、国土社、1970年、418頁）」といい、学校公開研究会は参観者のために開催したと記録している。その一方で同書で学

校公開研究会を学校づくりの山場として把握している。このように学校公開研究会には学校の外に向けての目的（参観者の要請にこたえること）と、うちに向けての目的（学校づくりの山場とすること）が同時に成立していたということである。ちなみに斎藤喜博が行なった学校づくりにおいて正式に参観者を記録するようになった1954年（斎藤喜博の学校づくりにおいて、3年目となる年）から参観者は年々増加している。1952-1953年までは正式な名簿をつくっていなかった。実際にはこの表には漏れている参観者もいるということであり、未発掘の参観者名簿が今後出てくる可能性もあり今後の検討課題である（金子緯一郎編『島小11年史』麥書房、1966年、後に、『島小研究報告』第6巻として、1995年に大空社から復刻された）。

7. 島小研究と公共の問題

現在進行中のプロジェクト「教育における公共」（野間教育研究所、教育と社会領域、田嶋一代表）においてこの4月から斎藤喜博及び、島小における公共の問題を主題とした研究に取り組んでいる。ちょうど斎藤喜博の資料が整理保存されることとなり、筆者はその仕事に関わりながら今後の斎藤喜博研究、島小研究にあり方について検討を重ねることとなった。

公共は、近代の概念であり教育における公共ということが今後の教育研究に与えるインパクトはどのへんにあるのかということが目下の最重要課題となっている。斎藤喜博の場合は、自らの教育実践に関わる資料をほぼすべて公開している点においてすでに公共性の高い研究課題である。斎藤喜博の教育思想や教育論が次の時代の子どもや大人たちに対していかなる遺産となるのかということがさらに重要な解明課題である。そうした問題意識にたてば、斎藤喜博が自ら校長として行なった島小における学校づくりは、斎藤喜博の典型となる仕事のひとつであり、また現在にまで残され

ている膨大な資料群に加えて同時代の関係者による証言が今後集められていくことになれば、さらに今後の教育界に対して豊かな研究資料を遺していくことにつながる。

筆者は、過日元島小教師である川嶋（児島）環（1956年、第二回公開研究会から島小の最終年度まで斎藤喜博校長の下で学校づくりに参画）とともに1962年度に本校3年生であった児童の、現在の姿に出会う機会をもった（2019年7月14日於：東京丸の内）。参加した方たち（元島小児童）は、66歳になるとのことで、今から56年前の小学校時代の思い出をまさにリアルに実質主義的に語り合う場に立ち合った。

当時、担任であった川嶋（児島）環がまったく知らなかった事実が卒業生から語られる。またその後の同校の児童たちの実情が実に豊かに語り合われるのである。

斎藤喜博は児童の卒業後の姿にはまったくの無関心であった。あえて学校づくりによって生み出された人たちがその後どのような生涯をたどるかどうかということは、教育実践の目的や課題ではないと明確に述べている。あくまでも教育実践

は、そのときどきに最も大きな効果を創り出すことであり、そのことに最も腐心したのが斎藤喜博である。そうしたことを鑑みたくえにおいても、卒業生の証言は、やはり文字や映像、写真などで記録された島小の記録をさらに補うばかりか、あらたな視角を導き出す可能性があると感じたのである。そうした資料から島小の事実をいかに読みとるか。今後の教育研究への遺産として島小研究をいかしていくうえで重要な事柄である。

それと同時に島小は、公立の小学校である。保護者も地域も教職員も児童も、すべて学校が存在する地域に根ざしている。特別の選抜や訓練を受けたわけではない、ということが斎藤喜博研究において重要な要素となる。誰でも、いつでも、どこでも実現できるのが斎藤喜博研究の成果であり、島小の成果である。どこにでも存在し、どこにでも実現できるのが斎藤喜博であり、島小である。そうした意味において、斎藤喜博が赴任した島小において、当初の3箇年間をかけて実行された学校づくりの内実は、今後さらに詳細に検討されることが必要である。今後の課題としたい。

